

# 専門の小児科医がネットワーク

# 未熟児ら地域で支援

未熟児や病気を抱えた赤ちゃんとその保護者を地域でサポートしようと、NICU(新生児集中治療室)で経験を積んだ開業小児科医らが「赤ちゃん成育ネットワーク」を結成し、活動している。ホームページを開設して全国約100か所の会員を、安心できる「かかりつけ医」として公開したり、海外の小児医療関係者と交流したりと、その幅は広がっている。

(小坂田基)

兵庫県三田市の男性(52)は、572gで生まれた長女を1年2か月間、NICUに入院させた後、自宅に連れて帰った時、大きな不安を抱えていた。しかし、保健師の紹介で訪ねたクリニックで、江原伯陽医師(52)が診察する姿を見て、その落ち着いた様子に安心したという。

江原医師は8年間、大阪府内のNICUに勤務した経験があった。その後は、「かかりつけ

医」として信頼し、熱が出た時の対応から就学に関する相談まで幅広いサポートを受けている。「大きな心理的な支えになつてもらっています」と男性。長女は現在7歳で、養護学校小学部2年生だ。

厚生労働省によると、出生時の体重が2500g未満の新生児の割合は、2004年には9・4%あり、年々増加傾向にあるという。

「問い合わせがあるという。リストがあれば、娘と旅行中に異常があっても、どの医師を訪ねれば良いか分かる」と男性は歓迎する。

また、同ネットワークは毎月、台湾の小児科医らで作る「台湾早産児基金会」のメンバーが、新生児医療では高い水準を誇る大阪府立母子保健総合医療センター(和泉市)を視察した際にコーディネーターを務めた。

同基金会を中心とした台湾での未熟児のフォローアップ体制は先進的な面があり、同ネットワークのメンバーが昨年、台湾を訪問している。こうした国際交流を通じ、海外の優れた制度を積極的に取り入れようという活動にも取り組んでいる。

江原医師は「今後は行政機関などとの連携を深め、地域で子どもを支える体制を充実させたい」と意気込む。また、同医療センターの藤村正哲総長も「退院後の子どもたちのためにも、ネットワークと手を携えていきたい」と期待を寄せている。



台湾から訪れた小児科医(左の3人)に新生児医療について説明する日本の医師。右はネットワークの江原医師(大阪府立母子保健総合医療センターで)

## 全国の会員 HPで公開

こうした新生児らはNICUで治療を受け、退院後もサポートが必要なケースが少なくない。しかし、里帰り出産などで自宅から遠方の医療機関で治療を受けた場合、通院などが大きな負担となる。

同ネットワークは、こうした新生児を支えるための、それぞれの地域で開業しているNICU勤務経験者らの集まりで、未熟児医療などの経験が豊富な「新生児OBA会」として2002年9月発足、04年5月から現在の名称になった。江原医師は事務局長を務めている。

ホームページ(<http://www.baby-net.jp/>)で今年から公開している会員リストには、往診や臨床心理士による育児相談の有無などの情報も記載。保護者らから各会員あてに、

NICUは、生まれた時の体重が1000gに満たない未熟児や、重い病気を抱えて生まれた赤ちゃんの治療にあたる、新生児用の集中治療室。厚生省の2002年の調査では、全国の大規模病院を中心に265施設、2122床ある。